

母乳性黄疸における抱合ビリルビンの動態

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 磯 部 健 一¹
共同研究者 伊 藤 進²

要 約：日齢21～39の母乳栄養児38名を血清総ビリルビン値により4群に分け、血漿抱合ビリルビンの動態を検討した。母乳性黄疸はビリルビンの動態を検討した。母乳性黄疸はビリルビン抱合阻害と腸肝循環の増加の両方の因子の関与が重要と考えられた。日齢14以後光療法を必要とした3例の遷延性黄疸を経験し、諸検査の後母乳性黄疸と判断した。母乳性黄疸は鑑別診断が必要であるが、母乳を中断しないで行うことが大切である。

見出し語：母乳栄養、母乳性黄疸、抱合ビリルビン、腸肝循環

研究目的：母乳性黄疸における抱合ビリルビン (BR) の動態を明らかにすることを目的として、日齢21～39の母乳栄養児38名のうち血清総BR値 (TB) が0.4～2.5mg/dlをA群 (10例)、2.5～4.0mg/dlをB群 (12例)、4.0～8.0mg/dlをC群 (8例)、8.0～17.0mg/dlをD群 (8例) に分けて、我々が開発したHPLCを用いて血漿中抱合BRを測定した。また日齢14以後でも治療 (光療法) を必要とした遷延性黄疸を3例 (母乳栄養) 経験したので同様に検討した。

結 果：① BR monoglucuronideはTBが高い群ほど高値を示す傾向が認められ、D群はA群に比べ有意に高値を示した。② BR diglucuronide/BR monoglucuronide比は

TBが高い群ほど低値を示す傾向が認められ、D群はA群に比べ有意に低値を示した (図1)。③ 遷延性黄疸例の中で、初期にはCrigler - Najjar症候群が疑われた例 (図2) では、日齢14以後でも3回の光療法を必要とした。血液生化学検査、腹部エコーに異常なく、母乳性黄疸と診断した。抱合BRは日齢30～38に80～100 μ g/dlを示したが、TBの低下した日齢79には12 μ g/dlに減少した。またコレステラミンの投与でTBは約4mg/dl低下した。他の2例でも日齢30前後のTBは15～17mg/dlで、抱合BRは37～52 μ g/dlと高値を示したが、TBの低下と共に抱合BRも減少した。またコレステラミン投与によりTBは約4mg/dl低下した。

1 香川医科大学母子センター Maternal and Children's Medical Center.

2 同小児科 Department of Pediatrics, Kagawa Medical School

考 察：母乳栄養児でTBが高値を示す群ほど
抱合BRは有意に高値を示し、BR
diglucuronide/BR monoglucuronide比は低
値を示したこと及び治療を要した児へのコレス
チラミン投与によりTBの低下を認めたことか
ら、母乳性黄疸の成因として、母乳中の阻害物
質による抱合酵素活性の抑制と腸肝循環の増加
の両方の因子が重要と考えられた。今回我々は

遷延性黄疸で光療法を必要とした3症例を経験
し、諸検査の後母乳性黄疸と診断した。しかし
母乳栄養児で遷延性黄疸を認める時には、母乳
中断によるTBの低下のみで母乳性黄疸の診断が
成されることが多い。以前に我々は母乳性黄疸
にクレチン症を合併した症例を経験しているの
で、鑑別診断が重要と考える。

図1 母乳栄養児のTB値別 bilirubine Diglucuronide/monoglucuronide比

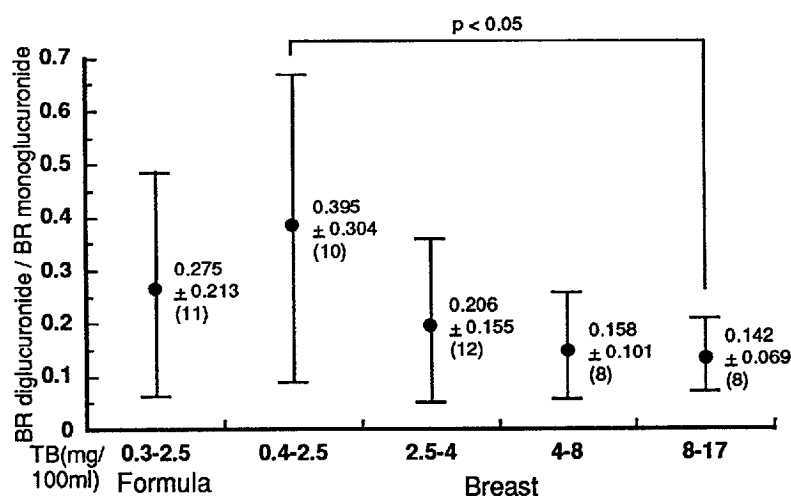
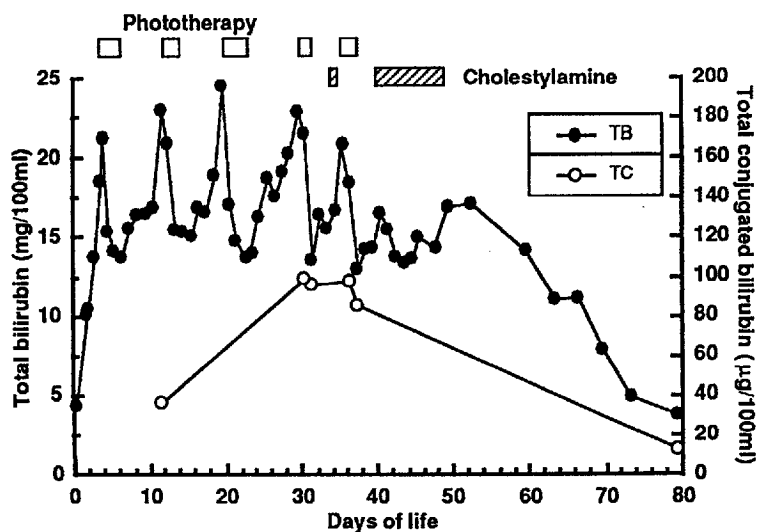
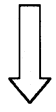


図1 母乳性黄疸で治療を必要とした症例

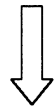
Case Y.H.





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 日齢 21 ~ 39 の母乳栄養児 38 名を血清総ビリルビン値により 4 群に分け、血漿抱合ビリルビンの動態を検討した。母乳性黄疸はビリルビンの動態を検討した。母乳性黄疸はビリルビン抱合阻害と腸肝循環の増加の両方の因子の関与が重要と考えられた。日齢 14 以後光療法を必要とした 3 例の遵延性黄疸を経験し、諸検査の後母乳性黄疸と判断した。母乳性黄疸は鑑別診断が必要であるが、母乳を中断しないで行うことが大切である。